

日本の政治外交。 異なる視点から見れば 裏歴史が見えてくる？

誰かにとつての国益は私にとつての国益じゃないかも？

国を代表する二つの機関が、それぞれ違う約束を外国と交わす。そんなことってあるの？と思うかもしれませんが、日本は明治以降、国内が統合されていない中で外交を行ってきました。1930年代に入っても軍と外務省は二元外交を繰り広げ、第二次世界大戦へと突き進んでしまったのです。現在も国内の意見が一致していない中で、法律や条約が制定される例は、いくつも思い浮かぶでしょう。誰もが「日本のため」と主張するのですが、どの立場で見るとかによって国益は変わります。メディアの情報も、一つの見方による一つの意見にしか過ぎません。世の動きを見るためには、幅広い視点を持つことが必要なんです。

「当たり前」というレッテルを貼らずに本質を見つめよう。

既存概念にとらわれていないと、物事の本質が見えにくくなります。例えば、世界平和のために力の均衡をめざすのが現実主義、話し合いによる協調をめざすのが理想主義とされていますが、言葉のままの解釈では理解できないことも。当時の状況や歴史的な経緯を知った上で、レッテルを貼らずに昔の政治家を見てみると、その決断や行動に意外な一面が見えてくる場合も少なくありません。やはり政治は人が行うもの。感情に動かされるなど、実はとても人間くさい面もあるんですね。法学という制度に注目しがちですが、制度の理解と同時に制度を動かす人の思惑や動きを知るために、ぜひ政治学も学んでほしいと思います。

法学部 法学科

矢嶋光先生

子どもの頃、日本の歴史を描いた漫画を読んで歴史好きになったと語る先生。今は政治家・芦田均の研究に没頭している。「第二次大戦前、戦争に反対していた芦田が、なぜ戦後になって再軍備が必要と主張を変えたのかを探りたいと思っています。政治史は、時代の制約と人とのせめぎ合いのドラマ。そこが面白く、はまってしまいました」。

芦田均日記 1905-1945

第4巻1937年～1945年／柏書房株式会社

外交官から政治家に転身し、内閣総理大臣も務めた芦田均。彼にのめり込むきっかけとなった運命の一冊です。戦時中ですが英語で書いてあったり、食事の内容も詳しく記録されたりしていて、そのまま歴史書として楽しめますよ。



私のマストアイテム

